

昭和五十四年七月二十三日
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第三五五号）

慈

光

次

目

内 愚 外 賢……………	近 角 常 観……………	(1)
釈迦如来を憶う……………	白井成允……………	(5)
静けさとほほえみ(三)……………	川畑愛義……………	(7)
自照日誌抄(八)……………	西元宗助……………	(11)
念仏詩抄……………	木村無相……………	(13)
聖徳皇の和の教え……………	花田正夫……………	(15)
撰 取 不 捨……………	石田十九三……………	(20)

第三十一卷

第一号

内は愚にして外は賢なり

近 角 常 観

たとい牛盗人とはいわるとも、もしは善人もしくは後世者、もしは仏法者とみゆるように振舞うべからず

聖人八十三歳、御満悦のあまり、安静の御真影を画かしめられしとき、一方には愚禿鈔を書いてその御自督をかたむけられた。実にこの鈔は聖人が中心の自由である。その思召しは題号の下のご悲歎でうかがうことが出来る。

「賢者の信を聞きて、愚禿の心をあらわす

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり

愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり」

とあるのが、即ち御自督のご悲歎である。

特に深くいただくことは、内愚外賢なりと言い放たれたままであるところが、実に深く感ずることである。唯信鈔文意に、内に虚偽をいなく、を釈されて「この世のひとは無実のころのみにして浄土をねがうひとは、いつわりへ

つらいのころのみなりときこえたり。世をすつるも名のころ、利のころをさきとするゆえなり。しかれば善人にもあらず、賢人にもあらず、精進のころもなし、懈怠のころのみつねにして、まことのころなき身とするべし」と云い放たれたままである。

かく言い放ちたるままにして、さらに善くすることの出来ぬのが我等の有様である。而して善くせんと試みんとする心が起らぬのである。全くあやまりはてるよりほかはない。しかし、何とかせねばならぬという心はない、なぜなれば、どこどこまでも見抜いて下されてお見捨てない御慈悲である。それかといって一点もこれよいという様な心持はない。聖人が恥ずべし、いたむべしと御悲歎せられるのがこれである。

恥ずべし、傷むべしというのは、我等が煩惱を見捨てた

まわぬお慈悲にかされて、煩惱の水とけて功德の水となる心持である。悪くてはならぬと堅く結んで益々凍るのではない、氷から暖みを出そうとりきむのではない、また氷のままでよいと寒風にさらすでもない。如何なる堅き氷の中心までも飽くまで透って下さる日光の力で、自然に強剛難化の水もとけて恥ずべし傷むべしとけてくるのが、よくもよくも我は内は愚にして外は賢なりというお悲歎である。

ややもすると恥ずべし傷むべしというは、これではならぬと固くなることの様にも思われる。現に御一代聞書には蓮如上人のお弟子が「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快まず」とあるのを読んで、往生すべきか、すまじきかと互に語りあうのを物越にききとられて、上人が申されるには「されば愛欲も名利も煩惱なり。されば機のあるかいをするは難修なり」と仰せられたとある。仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、喜ぶべきことを喜ばず、いそぎ浄土へまいりたき心のなき煩惱興盛の凡夫をことにあわれみたまうのである。してみればすこしも機のあるかないなしに、恥ずべし傷むべしと慚愧の外はない。

浄土真宗に帰すれども真実の心はありがたし
虚偽不実のわが身にて清浄の心もさらになし
とあるが、実にこの内愚外賢と仰言ったのと同じお懺悔である。しかし入信前には、浄土真宗に帰したとあるのに清浄の心もさらになしでは矛盾じゃないかと思うことがあった。しかしいただいて見れば、我等の不真実、不清浄であるのを見捨てたまわぬのが如来の清浄真実のおころである。如来は火、我等は炭である、この炭の心底までお慈悲の火がとおって下さるのである。かといって私共自身は徹頭徹尾まっくろい炭である、火が炭の心底までとおるところで火が燃える。お慈悲の火は我等不実の心をあわれみたまうのだから、御真実をいただければいただくほど、我身の不実を慚愧するの外はない。

気心を知った友人の前には何事も打明けて語り合って慚愧するように、如来の前には心の底まで打明けてはじいるのが、御悲歎の文の「誠に知りぬ、悲しいかな愚禿、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことをたのしまず、恥ずべし、傷むべし」と心をかたむけての御自由である。

よしあしの文字をもしらぬ人はみな

まことのころなりけるを善惡の字しりがおは

おおそらことのかたちなり

是非しらず、邪正もわからぬこの身に

小慈小悲もなければ名利に人師このむなり

と、八十八歳の聖人が、こう言い放たれたお慚愧がありがたい。名利に人師このむなりとは、実に何とも言えぬ痛酷なお懺悔である。我等は実に名利の奴である、愛欲のかたまりである。

蓮如上人のお弟子が、往生すべきか、すまじきかと案ぜられたように、とかく、名利でもよいとか、名利はいかぬとなりやすいのである。名利でもよいなら恥ずべし傷むべしでもあるまい。又信巻に御引用の涅槃經の御文に「名聞のためにせず、利養のためにせず、勝他のためにせず」という御文があるべきでない。さらに聖人が法然上人の御前にて「人師、戒師停止すべきよし誓言発願おわりき」とあるのを見れば、実に事実の上では、たしかに名利をすてたまえること、実に内賢外愚でいられる。

こう言うと、ただちに、それでは名利で悪いか、止めねばならぬかとなりやすいのである。勿論やめられるものなら止めるもよからう。しかし、石は落ちぬようにしようとするけれども、落ちぬわけにはいかぬ、浮かぼうとしても浮か

「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚偽をいだけばなり。」

これ聖人の真面目である。浄土真宗の安心も化儀もこの一語に尽きるといいたくべきである。

世の中の尼のころはすてよかし

女牛の角は さもあらばあれ

ああ我等は徹底徹底、罪惡のかたまりである。

たとい牛盗人といわるとも、もしは善人、もしは後世者、もしは仏法者とみゆるように振舞うべからず、と聖人が仰せられたのも、つまりはこの内愚外賢の御慚愧からあらわれた思召しである。

人より牛盗人と呼ぶるとまよ、もしは後世者、善人、仏法者と傍傍するほどの価値あるものではない、との御自督からこう仰言ったのである。

勿論、当時ずいぶん黒衣、裳無衣（うえなしごろも）を着て、高声に念仏して、仏法者めかした連中が諸国に横行したということが、歴史上にも見えることから見れば、その害もあったけれど、本来われらが左程の価値あるものではない、むしろ人より牛盗人と呼ばれようとも、我等にそれが適した名前と申すべきである。

ぶことは出来ぬ。その落ちることをあわれみたまう如來の本願自然の御力なればこそ、重い石が軽々と打上げられるのである。だから機にあつかいは微塵もいらぬのである。

それなのに機にあつかいをするのは、石自身があがろうとし、炭自身が火を出そうとし、氷自身が融けようとするに等しい。そのあがらぬものを引上げて下さるのが願力である、その炭を火にするのが慈悲の火である、氷の中にまでとおるのが如來の光明である。そのおかげで、恥ずべし、傷むべしと心底までとかされるのである。

このように解かして頂くけれど、たちまち寒風に吹かれて、本来の氷の性をあらわして、また凍ろうとし、炭火は火箸をもってつまみ出すと、たちまちに見る見る炭になろうとするのである。

われらはお慈悲を喜んだあとから、すぐさまその炭の本性をあらわし、また氷の本性をあらわすのである。我等は外に一応よろこびがあらわれても、本来が冷やかな凡愚であるから、とかく虚偽不実の本性をあらわし来るのである。この点では内愚外賢と仰言ったのが実に我等の真相である。嗚呼、内愚外賢は我等の写真である。ああ愚なる我等なる哉、聖人はこの御自督を傾けられたのが実にこの内愚外賢の御自白である。

聖人が愚禿と名告られたのが全くこれである。卑謙であるというてことさら卑下されたことと思うなら誤りである。御本書に仰せられたように、非僧非俗なりと仰言って、中心から、破戒無慚の愚禿なりとの御自督の自然の表現である。聖人の常の仰せに「我は教信沙弥の定なり」とあるのは、この非僧非俗の意味である。教信沙弥と云えば、直ちに貧賤生活とか、労働者とかいう他の意味を難じて、かえて通世、隠者、卑賤ということと思うならあやまりである。教信沙弥というのも、聖德太子の化儀も同様である。資生産業、即ち実相なりと仰言った聖德太子の信仰は、あきないをもし、奉公をもせよ、頼すななどをせよというのと同じである。これでこそ通世者ではない。聖人の隠遁は山より市へ出られた隠遁である。

聖德太子が「世間虚仮、唯仏具真」と御遺言されたが、聖人は「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもて、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」と仰言り、死後のことも「それがし閉眼せば加茂河にいて魚にあたうべしと仰せられたのである。これも教信沙弥が遺言して、遺骸を鳥獸に与えたのと同じところである。

（大正四年一月求道誌より）

釈迦如来を憶う

白井成允

一子地

上に記した仏陀の言葉、「奇なるかな、一切の衆生悉く仏性を有す」（或は「如来の智慧徳相を具う」）と云うのは、釈迦牟尼の菩提樹下にて到達したもうた仏陀の智慧の照らし明かしたもう真理である。その真理は、仏陀の智慧が、一切の衆生の、煩惱に燃え罪惡に苦しみて惡道から脱する由無き姿を、照らしみそなわしたもうた刹那に、即ち、それら苦悩の衆生を悲しみ慰れみて必ず救うと誓いたせたもうた一念の中に、証された真理である。仏陀の智慧が衆生の煩惱に触れて動きだし、其の苦悩を救う慈悲として働きたもう刹那に、自ら証された真理である。其故に此の真理の中に私共煩惱の惡人が安らわせていただき得るのである。

此の仏陀の智慧即ち慈悲なる境地を「一子地」と呼ぶ。

一子地という語は、逆惡のアジャセ王を救い、善根を断ちて地獄に墮ちた善星比丘を救いたもう仏陀の大慈悲を述べ

たまえる『大般涅槃經』に於いて頻りに用いられた語であり、仏陀の証したまえる大智大悲の心境を表わしまつれる語である。此の語を親鸞聖人は和讃に用い「三界の衆生をわがひとりごととおもうことを得ること」を云うのであると釈しておられる。仏陀の覺りの智慧において、三界（即ち欲界・色界・無色界すべて生死流転の境）に迷い悩む一切の衆生をひとりのこらず、吾が一人子（ひとりごと）と知ろしめす、その刹那にこの一人子を必ず「吾れと等しき覺りの境」に入らしめ安らわしめんとする慈悲心が動く。其故に仏陀の一子地に摂められて、私共一人一人が皆各々仏陀の一人子なのである。衆生各々が苦しんでいる、悉く是れ如来一人の苦しみであると云われる。一子地という語は限りなくありがたい。

此の如き語を用いて始めて示し得た仏陀の徳を釈迦牟尼は現身に於て覺り顯わし、而して私共に久遠の仏の法身のまします事を告げ知らしめたもうた。譬えば電氣の流れは

地球の生（な）りいでた初から流れていたのであるが、エ

ジソンが世に生まれて始めて之を知り、電灯を点じラジオを伝えるようになった如く、法界に満てる久遠の仏の法身を釈迦牟尼が始めて私共に顯わし伝えてくださった。釈迦牟尼の説きたもうた教は、恰も電燈の光や、ラジオの音が電流の表現である如く、其の本源に常になましし不斷に働きたもう久遠の仏の法身そのものを私共に伝え知らしめて下さる表現なのである。是れ現身の仏たる釈迦牟尼の御はたらきであるが、然し現身の仏が法身の仏を表わして下さる、其の御はたらきの始中終総べて是れ私共にとりては報身の阿彌陀仏のなさしめたまうところ、即ち南無阿彌陀仏の御めぐみたるに他ならない。

釈迦牟尼の御降誕にあたりて照り亘りたる光明は今も闇の世を照らし、鳴り響きたる樂の音は現に聳者の耳にも徹って来る。南無阿彌陀仏の御めぐみの故である。宝寿八十年、人の世の無常を告げてクシナガラの中に滅を示したもうた時、天界の聖母摩耶夫人を始め人も鳥獸も草木も悉く挙りて悲しみ歎き、御別れを惜しみまいらせた。一子地の御徳に潤わしめられたる故である。然も無常を歎く涙は、人の世の窮み無き限り常に新たに、一子地より流れる大悲の御涙に融かされて久遠の仏身に摂め取られ、常樂の覺りに安らい励むを得しめられる。南無阿彌陀仏の御めぐ

みの故である。

一子地を証して南無阿彌陀仏をめぐませたまう。釈迦牟尼の御生涯をしのびまいらせて、私共の生くる所以の理想と歩むべき道との既に明らかに解き示されたるを覚え、敬い慕い無窮の鴻恩を感謝したてまつる。

三界の衆生を吾がひとりごとみそなわす一子地に在りて、釈迦牟尼仏は、その衆生をすべて吾れと等しき覺りの境に到らしめようと願いたまい働きたもうた。其の御願を聞き、御働きを受けて、仏の道に醒めた者は、同じく之を世に伝えて、一切の衆生を生死の迷いの境から常樂の境に到らしめることに努めた。釈迦牟尼の滅を示したまいしより二千五百年、此の如き努力が不斷に受け継ぎ為され来て今日に及んだのであるが、其の世々国々に亘りて為された弘法傳教の流れの中に、私共にとりて最も親しく恵み深くとうとくありがたいものは、親鸞聖人の教である。聖人は釈迦牟尼仏から御自身に流れ来った仏道の真髓の伝統を敬い仰いで、浄土真宗を顯わし、「教行信証」を組織したもうた。「正信偈」は其の行巻を結ぶ六十行百二十句の偈文であって、聖人が仏道の真髓を証さしめられたもうた伝統の流れをしみじみと讃歎せられたものである。私共は此の偈文の中に於いて浄土真宗を知らしめられ、真宗の伝統を仰がしめられる。そして其は即ち、人生の理想と当に歩むべき道とを明かしめられる一大事に他ならない。

静けさとほほえみ (三)

川 畑 愛 義

御 六 字

池山栄吉先生は「汝、一心正念にして直ちに來れ」(觀經散善義)、これを「オネガイダカラスグキテオクレヨ」と読まれました。本当に、私たちに呼ばせなければやまないお慈悲がこもって南無阿彌陀仏になっている。私たちが、あだやおろそかに称えているんじゃない。この中にお慈悲のかたまり、私たちをお救いくださるそういう手だて、大悲、大慈というものがここに凝集し、結晶している。私はそういう言葉を使いたいのです。大きな、大きな天地宇宙に満ちたお慈悲、そういった、大悲大願が、ここに凝集し、結晶となっている。結晶といえば、他の夾雑物、つまり不純物が無いということです。そのお慈悲、大願の業力が凝集し、結晶したもの、これが御六字になったのだと。まことに称えやすくたもちやすい、私一人のお救いのお手だて。それは手段であると同時に目的であり、内容である。ただ称えさえすればよいのである。

ここに私は其死刑囚の言葉を思いおこす。それは彼が死刑執行を前にして書いたものが処刑後に出てきたもので、それをある教誨師の方が発表されたものです。その刑に処せられた人がこんなことを書いています。

今、何時ごろだろうか。

一声、ただ一声だった。

「お母さん」と呼んだ人があった。

何という尊い叫びだろう！

私は床から出て考えさせられた。

お母さんと叫ばずにはおられなかった。

あの人の心はどうであったのだろう！

文字にあらわせない思いがする。

仏名を聞いた思いがした。南無阿彌陀仏。

刑が明日か、明後日か―呼び出される時がもうこの世の

最期ですが、そういう時にですね、今、何時ごろだろうか。ただ一声だった。「お母さん」ときんだ人があった。何という尊いさけびだろう。私は床から出て考えさせられた。最期にお母さんという「呼び声」ここでは「お母さん」と「南無阿彌陀仏」が同じ次元におかれています。じつさい、仏とも法とも知らず、世の中のこと、社会のこと、何一つわからない、そういう私が念仏を唱えさせていただくということ。これは素晴らしいことだと思ふのです。私はいわば学者のかた端にいる者ですが、そのことは、科学すること、医学することと全くどこにも矛盾を感じない。

浄土真宗の教えほど迷信を排し、すべてのごまかし、妥協を許さない冷厳な宗教は他にないのではないかと思います。本当に聖人のお言葉には、大衆に迎合したり、微塵もです、方便のための妥協はない、真実そのものである。ですから多くの科学者たちがですね、最期にはこの御一門に帰する。これは当然なことだろうと思います。

科学・哲学の方法と宗教

私はこういうふうに思います。科学の方法というのは、観察―実験―分析、すなわち、ものをよく観て、それを実験で確かめる。そうして最後に分析し―分析し―分析してそして本体をつきとめる。これが科学の方法である。これに対し哲学というのは、主観を排して―できるだけ客観的

に観て、しかもそれを直感する。これを疑ってみて反省し、疑ってみて反省する。そして最後に自覚するもの、それが哲学である。ここまでは阪大の沢潟名誉教授の説によっています。これから先は私のドグマですが、宗教の方法というのは、それを自分の心に証(あかし)を得る。そしてその心証を理屈(わけ)もなく本心に我身に経験し、体験する。わが体で証をうける。最後にはその無限者の発する波長に感応する。からだ全体をもってそれを感応する。そういう点では宗教はある程度情緒的なものだといってもいいが、ない。

しかしそれは、理性と感情を超えて感応するものだと思います。以上を総合して、もっと端的にいうなら、科学は観る方法であり、哲学は考える方法であるといえる。そして宗教は聞くことによって得られるものである。蓮如上人も「ただ仏法は聴聞にきまらるることなり」といわれました。ただ、すなおに聴聞すればいいわけですが、それで、これら三つは方法とはと違っています。帰するところは究極的には一致するのではないのでしょうか。それは何故かという、自分のおごりの心、自分のよこしまで片寄った見方をしないで、ひたすら物事の真相、真実―まことの前に「ひざまずく」ということ「ひれふす」ということ、だろうと思います。そうすれば、この三つの方法はみな究極的に

同じことだということなのです。もしそこにいささかでも我執といえますか、邪見といえますか、そういうおごりの心があったのでは、その真実を究めることができないに違いありません。ですから最後には、自分の「我」の考えをみな払い捨てて、そしてぬかつく、ひれふす、ひざまづく。これがいずれの道を究めるのにも最後の態度ではないかと思うのです。そうして科学は、どこまでも鋭いシャープな眼で見、哲学は考えすまし、そして宗教の信仰の世界は、すべての自分の考えや知恵というような、ささやかな、けちっぽけな、間違ったものを捨てて念仏に帰投する。「煩惱具足の凡夫、火宅然常の世界は、よろずのことみなもてそらごと、たわごと、まことあることなし」というその諦観に立って「ただ念仏のみぞまことにておわします」と止揚する。これほどまでに、すべて一切の世間の知恵も才覚も、またあらゆる価値あるものを否定し去った、こういうことは珍らしいことだと思えます。だからもし何か自分にたよれるもの、何か自分がかかめるもの、信じるものがあつたら、宗教の道には入れないでしょう。そうした人々はそれぞれの世界で、それにたよって生きればよい。しかし握っているもの、つかもうとするものがすべて、死の前に空しくなるし、くずれていくことを忘れてはならない。そのことを聖人が私たちに教えて下さっている。そして

でも私たちは不自由をかこっています、もし両手がないことを考えてご覧なさい。

その後、生活のため旅巡芸に出ることになり、仙台で興行している時に、彼女は手のない踊り子として舞っていた。みなそれをおもしろおかしく見ていたわけですが、ある時、庭の梅の木に、巣ごもっているカナリヤのメスのところに、オスが餌を運んでいるのを見た。「ああそうだ、あのカナリヤは手が無いのに、口づてで餌を運んでいる。何とのどかでそして静かな生活だ」私でも口で書ける。彼女は小学校へも行ったことがなかったけれど、それから必死で字を習い、ついには「般若心経」を書写して、それが日展に入選した。

そうやって彼女は仮の庵（いほり）を寄附してもらい、そこで、たとえ体は不自由であっても、心を不自由にしないで下さい、と励ましつつ、肢体の不自由な人々や知恵おくれの子たちを集めて生涯を捧げたのでした。

三つの宝

彼女はこういうことも言っています。私は本当に、皆さんがめったに持たない三つの宝をもっている一つは無学、私は学校に行ったことは一回もない。で、どなたにも頭を下げて教えることが出来る。この宝はすばらしい。第二には無手、手がない。そのために私はカナリヤに物を書くことを教えていただいた。これはありがたい。第三には無銭、私には金がない。だからどんな乞食とも、どんな人ともひびきをまじえて話すことができる。これは、めったに

で、しかも、不思議にも、妙なことには、この念仏に帰依しますと、すべてのものが何一つ無駄なものではなく、すべてがうるわしい。またすべてが生かされて、すべてが真実、まことでないものは何一つなくなるのです。一人ひとりの生命は、無限にこのうえもなく貴重なものなのです。しかしその貴重なものを私たちは見失って、あれよこれよと外へ向かって血眼になっている、あわてて、騒いでいる。ピエロの如く踊っている。

大石順教尼

終りに、皆さんよくご存知だろうと思いますが、大石順教尼という人、この方は十七歳の時に義父に両手を切られた。で、その切った人が残酷にも、もう一度生き返りはしないかと思つて見直しに來た。ほとんど仮死状態―死んでいると見きわめてひきあげたというのです。

ところが、切られた順教尼は心の中で必死に南無阿弥陀仏―南無阿弥陀仏―南無阿弥陀仏をずっと心静かに称えていた。そうしてついに助かったのです。しかしその後、まあ自分は助かったんですけれども芸妓さんである。しかも世の中を見ると皆両手がある。私は片手でいい、手さえあれば……ああ手が欲しい、片手が欲しい。朝から晩まで手が―手が。なぜみんなに手があるのに私だけ手がないのか、ということに歎き悲しんでいたわけです。両手があつ

ただけでない三つの宝であると云つて喜んでいます。もちろんどなたも手がないことを喜ぶ人はおりません。けれども、そこに発想の転換、あるいは、価値観の大きな転換によって、彼女は幸せな人生を送つて、亡くなる時にこう云っています。

「私は幸せだった。もし私が手を切られなかったなら、私は世の男たちのもて遊び者になつていただろう。手を切られたために、私は仏のお慈悲にめざませていただいた。そうして多くの体の不自由な人、知恵のおくれた人たちと一緒にこの人生を静かに送ることができた、本当に幸せだった」。

彼女の歌に

彼女の歌に 合わせんすべもなき身には

ただ南無仏と称えのみこそ

つまり、有り難い、しかし合掌する手がない、でもまだ口が残っている。念仏は称えられる、ということである。人生に色々見方があるけれども、もの静かな、そしてほほえみのある人生というものを、生きる道しるべを与えて下さった御開山聖人。すべての功德をここに凝集し、結晶して、本当に称えやすく、たちちやすいこの念仏というものを、私にそっくりそのまま与えていただいたこの御恩、これはもうただならぬことであります。本当に皆さんと一緒に、この慈悲を喜ばせていただきたいと思う次第です。

(昭和五二、日曜講演)

自 照 日 誌 抄 (八)

— 諸仏の証誠護念 —

西 元 宗 助

この小文が、皆さまのおん目にふれるのは、お正月になつてからであります。よって、まず、

明けましてお芽でとうございます。本年も何卒およろしくと、感慨をこめて、つつしんでご挨拶申しあげます。

旧年を顧みて想わしめられること、それをひとくちにしていえば、「諸仏の証誠護念(しようじょう・ごねん)」ということにつぎる。まったく仏祖をはじめ師友―殊に浄土にかえり給うた師友―の護念のもと、このように大いなる光に照らされ生かされて、もう殆んど私は齢七十になるうとしています。いま机上にあります「慈光」誌を繰返し拝見しましても、池山先生をはじめ師友の護念と恩徳を憶うこと切であります。まことに諸仏の証誠護念のうちに、この年も明けたのであります。

○ 琵琶湖の東北、高月(たかつき)の双林寺で、ご住職・川那部学師に頼まれるまま、さる昭和五十年の早春から、

いのであります。さきほどから申しあげておりますように、仏恩報謝の慶讃法要は、私が住職をしているかぎり、いつまでも続けさせていただきまします。それで西元センセイには甚だ御迷惑でありましたが、まげてご承諾いただいたて、来春から再び歎異抄の巻頭から、この私のために、やり直していただくことにいたします。それというのも、歎異抄は、聖人じきじきのおん言葉、くりかえし／＼拝聴すべきものと思うからであります。けだし仏法は聴聞にきままる。わたしは、あと何年、この娑婆に生かさせていただけるか判らんが、命あらん限り、この私が聴聞させていただく。御門徒の皆さん、どうかお参りになってください。ご信心を身につけてください。おたのみします、云々。

川那部師、あとは感きわまつてお言葉にならない。ご門徒の方々の、あちこちから、お念仏をとえなさるのが聞こえてくる。感きわまつて鼻をすすするものもある。

わたしも目頭があつくあった。それに、すっかり、あわててしまった。もう四年にはなるし、往復には四時間余もかかることであるし、それに厚遇くださることも恐縮であるし、殊に昨今、疲労気味でもあるので、ちょうどよい潮時と思っていただけに、全く突然の仰せに狼狽しましたが、もうこうなれば、人生意気に感ずるであります。そ

毎月一回、歎異抄講話をさせていただいて既に四年。あと一回で終了となった去る十一月二十六日(日)、川那部(かわなべ)師は、参座聴講のご門徒に向つて一礼し、あらたまつて次のような主旨の、声源ともにくだる感銘深いご挨拶をなさる。

当山双林寺は、他のお寺のようにご門徒から沢山ご懇志をいただいて派手に聖人御誕生八百年の慶讃法要を営むことは考えませんでした。しかしこの貧寺が(門徒数は僅か)、四年前から毎月、西元センセイをお招きして歎異抄の法座をさせていただいてまいりましたのは、一にこれをもつて永続的に当山の慶讃法要を勤修させていただきたかったからに外ならないのであります。けだし花火線香式ではどうにもならぬからでございます。

ところで、この歎異抄の会も、あと一・二回で終了することに一応は、そうになりましたが、じつは終りとはならない

の場と思わず頭をさげて背づいてしまいました。

思えば川那部さんとも不思議な因縁である。学生時代、池山栄吉先生を中心に、学生仲間では花田正夫先輩をリーダーとして学生親鸞会が結成されていたころ、その仲間の一人が川那部さんであったわけ。当時、川那部さんは、大谷大学を卒業して、大谷婦人会の主事であられたとのこと。しかし当時わたしははるか後輩で、お顔を存じあげていた程度にすぎなかった。それが、川那部さんのご令息一家が拙宅附近にお住いということが機縁となつて、ご縁がいっそう深まったという次第、それにつけましても諸仏の証誠護念ということを想うこと、まことに切々でございます。

諸仏の護念証誠は 悲願成就のゆえなれば
金剛心をえんひとは 弥陀の大恩報ずべし

南無阿弥陀仏となうれば 十方無量の諸仏は
百重千重に繞して よろこびまもりたまうなり

念 仏 詩 抄

木 村 無 相

探して下さるは

和上とおおせに

真宗の御教化は

こちらで探さねば

ならぬチリまでも

向うから探して

下さるのじゃー”

和上〓禿頭誠師

探して下さるは

御廻向の智慧――

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

他 力

和上とおおせに

”とかく皆は

堕ちまいにかかり

助かりにかかる

一蓮院師の言に

他力のみにまかせて

いささかも

とりつく島なきを

他力と言うなり――”

一茶(いっさ)の句に

”ともかくも

あなたまかせの

年の暮”

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

魔 事

和上とおおせに

”念仏のみぞ

マコトにて

おわします――

念仏のほかは

みな魔事なりと

心得たし――”

魔事 魔事

ああ

その魔事にのみ
心ひかれて――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

牛

和上お歌に

”物呉れる

人にひかるる

つかわるる

牛となる身の

はてぞ悲しき”

生きながら

牛となりしか

物呉れる

人にひかるる

この身悲しき

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

聖徳皇の和の教え

花田 正 夫

和を以て貴しとなす

敗戦以来三十余年、日本は平和を合言葉にして来たが、年頭、あらためて「和」について聖徳太子の教えをこうむりたいと思う。一口に平和というけれど、妥協的平和と理想的平和と宗教的平和がある。

妥協的和とは、利害打算を本として、妥協して手を結ぶことで、世上到るところに見られることである。この移り易く破れやすいことは、昨日の友は今日の敵ともなりかねない。理想的和とは、自分が和ぐと共に、相手をも和げとかす道である。孔子の「人識らずして憤らず、また君子ならずや」等もそれである。又「敵を愛せよ」とあるが、その愛を徹底的に実践して、相手の心を和げるまで努力することも理想的和の一つである。しかし相對有限の身には、水槽の水がすぐ空になるように、根気負けしてしまうものである。ゲエテは、万人よくなりたいと願うけれど、それは「不滅であるが無力な願いである」と言いあてている。

大空の星に懷れながら、足は地を離れ得ないのである。第三の宗教的和とは、我々が和を願いながら、煩惱に障えられてどうしてもそうなれない身を「汝としてはそこがどうにもならないのだ。それが可愛想でならない」と限りない慈悲の涙をそいで下さる仏心にめぐまれて、氷がとけて水になるように、仏力の自然のはたらきによって、氷の塊りの身がとかわれるのである。このことを歎異抄の十六章に「わろからんにつけても、いよいよ願力をあおぎまいらせば、自然のことわりにて、柔和忍辱（にゅうわ、にんにく）のころもいでくべし云々」といわれている。この宗教的和を太子は御自身の上に頂かれて、和のともしびを高く掲げて下さったのである。

日本最初の憲法、十七条の冒頭に、「和を以て貴しとなし、忤（さかろう）ことなきを宗（むね）とせよ」と、太子御自身をふくめて、日本国全体の国是を定められたのである。ここでも世間一般の道徳とことなるのは、忤う無き

らん」

もしも、このように、上下互に和睦し、互に心から打ちとけて腹藏なく談合することができれば、三人寄れば文殊の智慧で、そこに自然に無理のない道理もあきらかになり、万事が順調にはこばれて、どんなことでも成し遂げることが出来るのである。こうした和ぎの世界の実現を太子は切望せられたのである。

共に是れ凡夫のみ

太子の願いに反して、徒党を組んで相争う現実に立脚して、その原因を憲法十條に次のように述べられている。

「忿（このころのいかり）を絶ち、瞋（おもてのいかり）を棄て、人の違うを怒らざれ。人皆心あり、心おのおの執れることあり。彼よしみすれば我はあしみます。我よしみすれば即ち彼はあしみます。我かならずしも聖にあらず、彼かならずしも愚にあらず、共にこれ凡夫のみ。よしみしあしみすることわりなんぞ能く定むべけんや。相共に賢く愚かなること鑑（みみがね）の端（はし）無きが如し」

ここでも所謂の修養道徳との差に刮目させられる。世間では、相手が自分と相違すると腹が立つ、これは無理のないことであるが、そこを抑制して、ならぬ堪忍するが堪忍と教える。然し太子は、怒ることを絶ち、棄てよとある。

相手がどうあろうとも、それで腹が立つのは、自分の内に

を宗とせよとある点である。忤らわさるでなく、忤う無きとは煩惱具足の身には不可能事である。この不可能の可能性は仏陀の加威力（かびりき）による外はない。具体的に申せば、またしても喧嘩性のやまぬ身に、そのやめられぬのが可愛想であると、それをわがこととされて暖かくおさめて下さり、その喧嘩性がなくなるまで涙をもって護り続けて下さるのである。私自身が反抗心の強いことで、父が涙をもって案じ続けて呉れたことをとおして、この仏心の大悲にも気づかしてもらっているのである。

さて、太子の仰せに照らされて、自分の実際の生活を省みると、いつもさからってばかり居ることが知らされる。

ことに人々が集ると自然に種々の仲間が出来、それに執えられて自分達の仲間のことばかりを考え、他の仲間を理解出来ず、互に徒党を組んで争い、怨みは恨みを呼んで動乱は続き、家庭の平和は破れ、社会の秩序が崩れるのがそのおちである。

「人皆党（たむろ）あり、亦達者（さとされるもの）鮮（すくな）し。是を以て或は君・父に順（したが）わず、たちまち隣・里に違（ちが）う」

とはいやと云えぬ現実相である。しかし次のように「然れども上和ぎ下睦びて、事を論（あげつら）わんに諧（かな）いぬるときには即ち事理自ら通る。何事か成らざ

瞋恚の煩惱の鬼が居るためで、それが縁にふれて飛び出すのだから、その煩惱を絶ち棄てなければ徹底した解決は得られないのである。

こうした教えの鏡の前に立つて自分自身の姿をかえりみると、互に是非、善悪を争っているけれど、自分は必ずしも聖人でもなく、相手は愚者とばかりとは限らない。人々にはそれぞれに自分の考えを持っていて、それによってよしあしと云っているのだが、省みればお互に煩惱具足の凡夫同士ではないか。一体誰が是非のけじめをつけ得るであろうか、と微に入り細にわたって教えられる。

法然上人の常の仰せに「是非も知らぬ無智の者なり」とあり、親鸞聖人は「善悪のふたつ、総じてもて存知せざるなり。その故は、如来の御ところに、よしと思召すほどにしりとおしたらばこそ、よきをしりたるにてあらめ云々」と仰言っている。自己中心の狭い浅い考えではどうしてか、時代と場所を通じて万人のうなづけるような道理を知ることが出来るようか。それなのに自分の考えを絶対に正しいと信じて、人をばかり責めていることの愚かさは一応知らされる。然し問題はそれを感情と意志の上で云いかえればその通りが身に行えることはまことに至難である。というのも、自分の顔は自分で見えぬように、相手の欠点は見えても自分の欠点を知ることができないからである。蓮如

の身となり、互に手を執って物事を処することが出来ることと示されている。これは菩薩の同事(どうじ)の行(ぎょう)をあげられたのである。病人に達者な者の考えを強いるのではなしに、病人の身になって看護するとき、病人の心はやすらぎあたためられる。われ心得顔になるのは、いまだに絶対の教が身についていないからである。「衆流に冥合して更に異趣なし」と経にも示されている。このことは求道の上でよくよく猛省せねばならぬことである。

直枉の道

以上、凡夫の身が、仏陀の徳光に浴することが出来るのは、「篤く三宝を敬う」、即ち憲法第二条を淵源とする。經典にも、信は道の元、功德の母なり、とある。又、行善の義本帰依にあり、とも云われる。

凡夫の境界にあって、我非他非、我他彼是、と争いを続ける外にない煩惱具足の身には、絶対平等の仏心のおまことに帰する道以外に救いの光は射さないものである。

そこで帰依について太子は「如来に調伏せられて如来に帰依し、法の津決をえて信樂の心を生ず」と仰言る。相對虚仮の凡夫が、絶対真実の如来に帰依するなどとは不可能である。しかし、この信じることもできない煩惱具足の我等を、如来は倦むことなく休む時なく悲愍し、救いの手をさしのべて下さるのである。丁度、親心を子知らずである

上人が「誰れのともがらも、われは悪しと思う人、一人としてあるべからず云々」と御一代問書に誌されてある通りである。

特にここで「凡夫」をたゞと読みなれているが、太子が仏道に到達していられた点から、ほんぶと訓むのが至当であろう。さて、仏法の上からは、凡夫の自覚は凡夫には出来ない、菩薩も第八地の不動地に到達して、はじめて自分は凡夫であったと自覚するとある。狂人に病識がなく、夢中に夢に気づけず、醒めてのちに夢と知るのと同じである。ことに太子は法華經・維摩經・勝鬘經を精読されて久しく、とりわけ菩薩の不動地を中心に説かれた勝鬘經を奉じられたところからも、ほんぶと読むのが太子の御心にお添いするとおもう。

「共に是れ凡夫のみ」ということを凡夫の我々に自覚は出来ないが、仏や菩薩の導きで信知せしめられる時「彼の人は瞋るといえども、かえって我があやまちを恐れよ。我ひとり得たりといえども、衆に従いて同じくおこなえ」といふゆとりができる。相手が怒るにつけ、自分に気付かぬ事で相手を怒らせているのではなからうかと反省し、また真実に道を得ると、われ心得たりという油が水に浮いたような独りよがりではなく、開かれた信眼をもって、相手

が、知る力もない子を捨てて親はなく、昼夜不斷にそいでやまぬ親の真実心が、やがて子にとどいて、親のふところには子に帰えらされるのである。有名な姥捨山の話はこれを象徴されたものである。

奥山に枝折り枝折るは誰がためぞ

親の身すててかえる子のため

親は子に捨てられながら、捨てる子のために路々に枝折りをせずには居られぬのである。現に私自身が、親を火鉢あつかいして、火鉢は冬はあったかいが、夏は邪魔になるように、自己中心ではかり見て、その利己の心から、捨てたり、とったりして来ている。こうした不孝者に絶えず慈愛の手をさしのべて下さったのである。それも生前よりも親を亡くしてのちに、折にふれ、事にあうて漸次に気づかされてくるとは、何と愚鈍な身であらうか。

しかも太子はこの条で「人はなほだ悪しきものすくなし。よく教うればしたがう」と加えていられる。即ち、人間の悪がどんなに重くとも、仏を負かし、呆れさすことは出来ない、やがて真実の教にあってそれに従わない者はない、と断言されるのである。ここには最近の流行語の、お・ち・こ・ぼ・れる・人・は・出・な・い・の・で・あ・る。このことは私共にとって是非常にありがたいことである。もし地上に一人でも如来の慈悲の手からもれる人があれば、そのまま私も救われな

いからである。というのも、八万四千の煩惱を残らず身にもつ私共にしてみれば、業縁次第でどういう業さらしをしでかすかわからない身であるから、一切の人々の業報の中に自分の姿を見出さざるを得ない、そこに光の射しこまなところがあれば、自分もまた闇に沈むのである。一切人の救いの中に煩惱具足の私の救いを見出し、また自分の全体の救いにおいて、一切人の救いの光明を見出すのである。歎異抄にも「本願を信ぜんには、悪をもおそれなし、本願をさまたぐる程の悪なきが故に」とあることは、何と力強い無碍の光照であらうか。

最後にこの条の結びに「それ三宝に帰せずんば、何をもってか枉(まが)れるを直(ただ)さん。」とある。ここは太子御自身の告白として、読む者の襟を正さしめられるのである。というのも、太子の一番難渋せられたのは蘇我馬子である。彼は太子の叔父君の崇峻天皇を殺害し、武力と財力によって横暴を極めていたのである。そうした者と共に政治をとられる太子は、一言も他にもらすことのできぬ御苦悩を持たれたのである。しかも其間慧慈法師によって仏道に深く帰依されるにつけ、そこに御自身の救いと共に馬子の救いをも見出されて、自分の力でどうすることも出来ぬ馬子であるが、仏力は必ずお見捨てになることはないと確信され、「世間虚化なり、唯仏のみこれ真実」と御

攝取不捨

同信会の御縁

昨年より近くのお寺にお参りするようになりましたのも妻が病弱でしたので、すすめてくれたのですが、今度は妻から、有難い御法話をなさる方が今晚お出で下さるので、私にだまされたと思って参詣しましょう、と申しますものですから、連れだつて参りました。

法話して下さる先生は、大谷大学教授の稲津紀三先生でした。先生は当時、お話よりもお念仏を多く申される方でした。その後、私共十人程で会を作ることとなり、先生が同信会と名づけて下さいました。

それからは御参詣の人も多くなり、講師様も、宮地廓慧先生、榊原徳草先生、近所へ川畑愛義先生も引越して居られ、時々ご法話をお聞かせいただき、京都学生親鸞会の内田卓二さん始め、多くの人達の後援をいただき、段々法話が少なくなり、一人一人御示談をうけたまわって居りました。私は兄を亡くしておりますので、先生亡くなった人に

自身を含めて、そらごと、たわごと、まことあることなしと慚愧されて、仏のまことのひかりひとつに転悪成善せられることを讃仰せられたのである。

機縁

菅田 豊吉

お慈悲は如何なる人の心の奥にも来り給う。然るに何故に多くの人はお慈悲を感じざるか。曰く、我執ありてお慈悲をさまたぐるが故なり。三毒の煩惱に狂わされて、いつもお慈悲にそむきおるなり。然るにある機縁によりて、忽然お慈悲に気付かせてもらう。それに種々あり、或は善知識、経卷等の順縁。或は病氣、失敗などの逆縁等あり。これらの機縁もお慈悲の善巧方便に外ならず。云々

感応と共鳴

一たびお慈悲徹到し給うや、われは大いなるお慈悲に抱かれておるなり。お慈悲は一気流通し間断やまず、入るなく出ずるなく完結自全、悠々自適の妙境を与え給う。

お慈悲普く貫通し給う。故に数百年前の親鸞聖人のお言葉は直ちに数百年後のわが心に感応し、数千里外の同信の手紙は直ちにわが精神に共鳴す。

お慈悲は普遍なり、古今なく東西なし。故に感応にも古今なく、共鳴にも東西あることなし。されば一同行の真信は、他の同行を動かして四海兄弟の感あらしむ。

石田 十九三

会うことが出来るでしょうかとおたずねしますと、あなたが信心を獲られたら、やがて浄土に生れ、成仏させて下さるので、たとえ六道、四生の業苦に沈んで居られる方でもお会いしたすけとけることが出来ます、と先生は教えて下さいましたので、一生懸命に聞法しました。しかし田舎では母と兄嫁とで多くの稲作を取り入れなければなりませんので、私達夫婦が手伝うことになっておりましたから八月下旬にまた田舎に行きました。

或日、母が私に、親類の相談の結果、お前が家を継ぐことに決ったから、これからずっと家に居て百姓をしてくれと申します。そこで私の妻をどうするかと聞きますと、そのことは京都の両親からも承諾を貰って居るから心配しなくてもよいと申します。しかし病弱な妻と別れて、兄嫁との生活が出来そうもないし、私の妻がこの際別れたいと云うのであれば、母の考えにもそいえないこともないが、妻の両親が何と云われても、妻の意見を聞かねば母に

何とも返事が出来ません。取入れにはいると多忙な日々が続く、離婚や再婚のことも忘れて働きました。

その時期に、妻の兄上が離婚承諾の話を私に隠れてして行つたことを後で聞き、私は腹が立ちましたが、妻は十月二十日に京都に帰ると申しますので、一応帰しました。十月末に、稲作の取入れも終り、体を休める日も多くなると、親類の人達から兄嫁との結婚の相談が又々もちあがつて来ました。私もどちらかに決心しなければならぬことになりましたが、今迄いろいろ苦勞して育てて下さった御恩を思うと、むげに京都に行くことも出来ず、又京都の同信の方からの知らせでは、妻が淋しく貴君の帰りを待って居るとの手紙を見ると、堂尻川で二人糸を垂れて思い悩む日を重ねました。

私の家では、祖父の兄が女子を一人残して亡くなり、兄嫁と祖父は結婚しましたが、自分の子供、男子二人、女子二人を生みましたが、祖父の兄の娘に養子を取って家を継がすことにしましたので、自分の子供が大きくなるにつれ家の中にいざこざが断えることがなく、分家させたのとこのことです。私も兄の子供が三人居りますし、もし兄嫁との間に何人かの子供が出来た時、兄の男の子に後を継がせ幸福な生活が出来るかと自分の心に問うてみても自信がありません。

の絶対他力と体験という本を借して貰いましたので、何度も何度も読みかえました。特に先生がご信心に気づかれた事を書いてあるところをくり返し、くり返し、拝読しましたが、一向に信心が獲られませんでした。

一方同信会に参詣する人も段々多くなり、御示談をうける人も多くなりました。又桜井広済会館にお参りする日も多くなりました。私は日頃の母の御恩も、泣いて諫めてくれた兄に対しても、恩を仇で返した者ですから、地獄は必定と申されると、何の返す言葉もない人間であります。それですからお慈悲の阿弥陀様のご苦勞を聴聞するにつけ、ありがとうございますと申し、お念仏を称えるばかりでした。このように私がお慈悲をありがたいと申し、あれもこれもありがたがっていた頃に、妻が何もかもわからなくなつたと申して居りました。

その頃、榎原先生の入信記を読ましていただきました、それには「一度すべてのことが闇にならなければ駄目です。世の中のことが第二段になつてくる」とありましたが、「その時どういう意味かどうしても了解できなかった」とのことを書いてありました。さて、今私が喜びつつ生活しているのに、妻は何もわからなくなつたと申しているが、妻の方が信仰の道程としては、「一切が闇」の境地に近く、私の方がはるかにおくれている、これは何と矛盾

そこで、小慈小悲もない身であることが分つて居ながら何も無理をすることもあるまいと決心して、母の留守の間に荷物を駅に出し、切符を買って家に帰ると、もう早や荷物を持って出たことが知れ、母は歎くし、親類の人達は集つて来るし、こまりはてた挙句、私は妻が得心の上で、妻の両親が離婚を承諾したのなら、田舎に帰ってくるからと申し、其晩、京都に向いました。

京都の家に着くと、同信の人達は、石田さんは帰って来られる、心配せずに待つて居りなさいと云つて妻を慰めて下さつたそうです。

私は先祖のことを書き、そのため母や兄の代まで伯母にいじめられてきたことを詳細にかき、自分にはそのようなことができたとき解決する自信はないから田舎には住まれない、と書き送りました。すると母は、始めてお前がそんなに深く物事を考へての上なれば、もはや今までの事は忘れましょう。来年の兄の一周忌には必ず妻と一緒に来られるようにとの返書でした。そこで父の亡い後は私共を相手にして家を護つてきた母の願いにそむき、愛欲の広海に沈んだ自分を思う時、一日も早く大慈悲の阿弥陀様におすくいをお願い外に道のない私でした。

機縁次第に熟す

その頃でした、秋田さんといわれる方から池山栄吉先生

盾したことだろうと思ひました。

しかし今となつて其頃の私を省みると、私の喜びは、自分の能力でこなせる程度の御法話を聞き、これもありがたい、あの言葉もありがたいと喜んでいたのでした。

昭和九年一月四日の午後、池山先生の御宅に行くことを学生親鸞会の方々にさそわれてまいりました。先生は色々とお話し下さいました終りに近い頃レコードを聞かしていただき、「市丸のように大衆の心を引きつけられたらね」と言われました。

先生の講演会のあります会場は、立錫の余地もない聴衆ですのに、人を引きつける力が市丸ほどだったらと思われたのでしょいか。私は先生が自信教入信の立場から仰言つたこととありがたうお聞きしました。

突然、先生から、石田さんはこの正月の会に何度もお出でになりましたか、と聞かれましたので、今度が初めてでございますが、同信会の人達ともう一度お邪魔させて頂いたことがありますと申しあげました。また実は先生の絶対他力と体験という本を読ませていただき、先生の入信せられたところをくりかえして読ませていただきましたが御信心がいただけませんと先生に申し上げました。

すると先生は、そうでしたかありがとう、と云われ、更に、石田さんあそこはね、私は何百回、千回以上も拝読し

ましたよ。歎異抄を信仰がいただけるまでお読みなさいとお教え下さいました。それから早速ご信心がいただけるまで読まうと決心し、一日に一回は、十八章全体と、前文と後文とを併せて毎日読みながら歩きました。

二月に入ってから同信会の人で初めて廻心されました人がありました。二月八日、仕事から帰ると、杉原先生の奥様が、稲津先生が来て下さっていますと知らせして下さいましたので、夕食もそこそこに会館に行きました。私は先生の近くに座りますと、すぐ先生は「石田さん杉原さんの奥様が喜ばれてね」とお喜びの言葉があり、続けて「杉原さんの奥様は、何を信じてよいのか対象となるものがわからないと言われましてね」と言われました、その時私はハッとしました「自分は何を信じているのだろうか」と反省しますと、何と今迄信仰していると思っていた自分の信仰はどこえやら消えてしまつて、闇と空虚があるのみでした。たまりかねて「私は先生救われないのでしょうか」とおたずねしますと「あなたが救われようと思つても救われません」と先生のお答えでした。

私は困りました、千仞の谷底に落ちたように思いました。私は淋しさと悲しさで泣きました。私と共に同座して居られる皆様は、今まで以上にお念仏を称えられましたので、私も仕方なくお念仏を申しました。すると皆様が喜こ

のことで、どうにもならぬ私の心に如来のお慈悲が満ちているのか、なんと有難い事だろうと思つたのも束の間、またもや散乱の闇でした。ことに今日は先生のお誕生日で、お客様も来ておられるので長座しては済みませんし、私も足が痛くてたまらないので止めていただきたいと思ひ、また今の自分を救つて貰いたいと思つてもどうにもならず、この浅間しい自分に泣かずに居られませんでした。

願力無窮にましますば 罪業深重もおもからず
仏智無辺にましますば 散乱放逸もすてられず

とは、先生からその晩聞いて覚えたと和讃でした。

お話がやつと終ると肩の荷を取りおろされたようにほつとしました。そこで妻にお示談をして下さる様お願いして宮地先生御夫婦と共に家に帰りました。

妻のよろこび

十五日、今日は稲津先生に、妻に法話を聞かせて頂くことをお願いしております日です。夜明け前から降り出した雪は一尺程に積り、まだ降り止みません。妻が妙心寺まで行けるだろうか心配していましたが、午前中に元氣よく出かけました。寒さに弱い妻が出て行く姿を見て、どうか御仏様のお慈悲がわからせて貰つてくれ、そうならば私も大分救われる。強情な妻でもすこしは女らしくなるだろうと、自分に都合のよい事を考えて留守居しております。

んで下さるので私も一時は廻心したのかと思いましたが、家に帰ってから会場での出来事を思い出して、疑いが出てきました。そしてひとりごとのように妻に云いました、自分の心で左右されるようでは本物ではないのだ、と。遂に不安に閉ざされた私は、妙心寺の稲津先生の宅を十一日におたずねしました。

先生に先日のお話を申し上げると、疑いが出るなら廻心ではなかったでしょう、と仰言つた。ここで私は淋しい心の中にも何となく落着きました。それから先生は一生懸命に御法話をして下さいましたが、聞けば聞くほど何もわからなくなつて、何もかも闇黒の世界でした。唯もう先生におすがりするより他に何もありませんでした、先生どうか信じさせて下さいという願いだけでした。そして、そのうちに信心がいただけ、歎喜の涙にむせぶようになるだろうと思つて座つておりました。

先生の熱意は少しも衰えず、御話し下さるのに、私の心は四方八方に散乱し続け、家庭のこと、故郷のこと、友人のことなどが思い出され、心を鎮めようとしても、どうにもなりません。そこで「私の心は先生の御法話が少しもわからず、唯散乱放逸するばかりです」と申上げると「それが実際の貴方ですよ。それを知ることができるのは闇い貴方の心に如来の光明がともされているからです」と

私が妻にお寺参りを勧めたのも、今書いたような気持ちからでした。暮れるに早い冬の日の午後四時頃に妻が帰りました。家を出る時はあまりお念仏を申さなかったのに、今はとどなくお念仏を申して居りました。早速お仏壇に礼拝して、正信偈を涙ながらに拝読するではありませんか。そして御文をたどたどしく読み終ると又一入お念仏のみでした。私は何となく羨しくなつてきました。

妻が申しますには、貴方のように理屈を覚えるのではございませんでした。ただお念仏一つでおたすけいたただくのでした、と。私は嬉しいやら羨しいやら何とも申しようもない思いでした。永らく妻もご信仰を求め、私もその日の来るのを願っていたのに、共に心から喜ぶことの出来ない私、そんな悪性な心が私の心のどこに潜んで居たのでしょうか。悪性さらにやめ難い自分をいやと言うほど知らされました。妻の称えるお念仏に聖なる圧迫を感じながら、外面は共に喜んでいる様な風をしている浅間ましくも矛盾している自分を見るにつけ、また淋しさが増すばかりでした。その頃の私は先生方にお会いするとお念仏が申しにくくなつていました。それは、先生方は私の心中を見抜いて居られる様に思ったことと、自力のお念仏を申すことが堪えられなかったからです。

(続く)

あとがき

年祝きに何はまほさむ念仏に生くる喜び
祝言とせむ 柳瀬 留治

昭和三十三年の元旦の柳瀬先生のお歌を掲げて年頭のご挨拶にさせていただきます。地上の喜びには皆暗い蔭がつきまとうてきますが、お念仏に生きる喜びにはそれがありません。素裸のなりに渴仰させていただけること、まことに稀有最勝の法と大きくうなづかせて頂きました。

「内愚外賢」の親鸞聖人のお言葉は、私共にとってまたとない德音であります。みつつた稲の穂は自然に頭がさがりますが、私のような空っぽの身にはそれは出来ません。こうした身に同座して下さる聖人、この方ましますと、年頭あらためてかえりみさせられますことです。

自井先生の釈尊を仰がれる中に、センダイ成仏の大悲の至極をお示し下さいました。地上に一人でも大悲からまれる人があれば私もおちこぼれるのです、縁次第でどうした業さらしするか判らぬ身でありますから。大悲の至極はそのまま私一人のため

と知らされますことです。

川畑さんは、お念仏を讃仰して下さり、お念仏の輝くところまた一切のそらごとたわごとが、まことに転成される趣きを知らされました。

西元さんは、お念仏のなかに、十方無量の諸仏の護念を感得せられての信の旅姿を語って下さいました。

木村さんは、初冬とは申せ十一月の下旬に、愛知、岐阜の信友を訪ねて昨年最後の旅。十二月はじめに無事帰園の電話でホッとする。しかし日ならず心臓ゼンソクの大発作で入院絶対安静中の報せをうけ、御恢復をただ念じております。

石田十九三さんの仏掌裡の歩み、機縁のいよいよ熟されて行くのに身が引きしめられるのをおぼえます。

年頭、私は太子に和の精神をお聞きし、そのままするしました。これといえますのも私自身が反抗心の強い、そのために度々やりそこなつては、人を傷つけ自身を害していながら、七句をすぎた今も、そのどす黒いうごめきを知るにつけ、太子のお言葉に如来の大慈大悲心を仰がせて貰っておりますような次第であります。

△御案内▽

○毎月第一、第三日曜、午后一時半、一道会例会。一道会館。

南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅。

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。

地下鉄、新端橋下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り下車。又は北山下車。地下鉄、御器所通り下車。

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。(但し日曜を除く)尾西市三条板倉新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価 半年 七〇〇円(送共) 一年 一四〇〇円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八 編集・発行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 坂部 光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号四五七